

韓国人の日本語学習者における 言いあやまり研究

— おもに子音（無声音、有声音）について —

柳 京子*

(e-mail : kjyoo@smu.ac.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 日本語の言いあやまりの分析研究
 3. 日本語子音（無声音、有声音）の言いあやまり調査と分析
 4. おわりに
-

1. はじめに

言いあやまり研究は言語教育実践にも影響を与え、第二言語習得過程に大きな示唆を与えつつある。それは言いあやまり研究が、1960年代末までに第二言語習得に関して主流となっていて対照分析や行動主義理論では予測も説明もされなかった学習者の誤りを説明し、今日の言語学理論と応用言語学の領域とを関連づけることができたからである。

本研究では先行研究で明らかにされていない、次の二点に力点をおき、研究を行う。

1. なぜ、言いあやまりが起こるか、その原因を探るために言いあやまりの中でとくに注目されているインターランゲージ(Interlanguage:中間言語)に関する仮説を設定し、その仮説を言いあやまりの調査から検証する。
2. 従来の主観だけによる方法から脱却して調査資料の検討、あるいは分析結果に基づく研究をする。

* 祥明大学校 教授 日本語学

* 本研究は祥明大学校校内研究費の支援によってなされた論文である。

これらは先行研究の何れにも十分に組み込まれていない研究である。本論文では、このような問題意識に基づいて言ひあやまり研究を実践的な（教育的な面）の側面から、より体系的にとらえていくことを目指している。

2. 日本語の言ひあやまりの分析研究

最近の言ひあやまり研究ではインターランゲージ体系、すなわち、第二言語体系とも違うインターランゲージ体系の存在を確認し、その特質を明らかにしようとする研究がなされつつある。これらの一連の研究から第一言語の干渉とは異なったインターランゲージが、音声レベルでも存在することが証明されることとなった。インターランゲージ音韻論分野での大家のひとりであるTarone(1980)¹⁾は、量的観点から、干渉エラー、非干渉エラーの割合を見ることによって、インターランゲージの音韻構造の存在と実態を確認しようとした。これに対して、Eckman(1981)²⁾は、いわば、質的にインターランゲージの音声体系のルールを厳密に第一言語と第二言語と比較、検討することによって、音声レベルにおけるインターランゲージの本質を明らかにしようとした。Eckmanの結果は、Taroneの研究と、インターランゲージに非干渉エラーがあることを認めた点で一致しているが、さらに一歩進んで、インターランゲージ体系が完全に自然なものではないことを実証した点に注目してよいであろう。

また、Tarone(1988)³⁾はインターランゲージで起きる体系的な誤りの可変性(variability)を指摘した。彼は多くのインターランゲージ研究を分析して、インターランゲージが言語的コンテキスト、心理的プロセス、社会言語的要因からなると主張し、とくにコミュニケーションを統合的にみて、この解明が必要であることを結論づけている。言ひあやまり研究におけるインターランゲージ体系の分析研究は、まさに新しい時代に入ったと言える。Eckman(1981)⁴⁾は、Jakobsonの有標性(markedness)理論⁵⁾を導入し、有標性の概念

1) Tarone, E. 1980 Some influences on the syllable structure of interlanguage phonology, pp139-152

2) Eckman, F. R. 1980 Predicting phonological difficulty in second language acquisition, pp18-30

3) Tarone, E. 1988 Variation in interlanguage.

4) 注2)と同様。

5) 有標性理論では、世界の諸言語において、ある言語的要素が他の要素より基本的かつ自然で、使用頻度が高いとき、その要素を無標(unmarked)とし、他の要素を「有標」であるとするものである。この理論では、子音と母音について「基本-複雑」のスケールが観察されると主張している。これは、最初に現れる母音の対立は広母音と狭母音(例えばpa-pi)の2母音であり、次に現れる狭母音の前舌後舌の対立(例えばpa-pi-pu)が、広母音 中母音 狭母音の対立であるという。子音の有標性は、次のようになる。

を対照分析と組み合わせれば、第二言語の相対的学習難易度を予測できるという仮説を立て、中国人(広東語を第一言語とする)の英語学習者の発音データを使うことによってこれを裏付けている。例えば、中国語の広東語の閉鎖音と摩擦音には、有声・無声の対立(/g/-/k/)はないので、対照分析仮説だけでは、広東語話者は英語の有声閉鎖音・摩擦音をすべての位置において無声化してしまうという仮説しか成り立たない。しかし、有標性の概念を加えれば、語尾の有声・無声の対立は有標性が高いので、他の位置での対立より学習が難しいという仮説が成り立つ。実際、この仮説どおり、広東語を第一言語とする被験者は語頭・語中では有声・無声の対立を習得していたが、語尾では習得していなかった。

このような音声環境の問題は、日本語と韓国語の対照分析の場合と非常によく似ている。例えば、日本語と韓国語の対照分析仮説では、学習初期における誤りばかりに関心がはらわれ、韓国語を第一言語とする日本語学習者の音声体系の発達過程という側面に注意を向けなかったことである。このように対照分析仮説の限界は、学習初期における誤りばかりに関心がいき、学習者の音声体系の発達過程という面に注意を向けなかったことであつた。Major(1987)⁶⁾は、インターランゲージ音声体系の発達過程を第一言語干渉と発達上のプロセス(developmental processes: 近似化、過剰一般化、第一言語習得プロセスなど)の影響力の変化を用いて説明している。このモデルによると、発達過程の初期には第一言語干渉が優勢で、これが徐々に少なくなっていく。一方、発達上のプロセスは第一言語の干渉が初期には少ないが、徐々に増え、中期にもっとも多く、その後減少していく(図1を参照)。Majorはブラジルの英語学習者の発音を分析し、この発音発達過程のモデルを支持する結果を示している。

さらに、Beebe(1984)⁷⁾は中級・上級英語学習者の発音データを分析し、第一言語音がそのまま転移するような誤りは少なく、第一言語音でも第二言語音でもないインターランゲージが多く観察されたことを報告している。この結果もMajorのモデルを支持するものであつた。

破裂音>摩擦音>破擦音

i. [p][t][k]>[b][d][g]

ii. [s][f]>[z][v]

この有標性理論については、次の文献を参考にする。

Jakobson, Roman(1939)*Les Lois phoniques du Langage enfantin et leur place dans la phonologie générale.*

Jakobson, Roman(1941/68)*Kindersprache, Aphasie und allgemeine Lautgesetze Child Language Aphasia and Phonological Universals.*

6) Major, R.C. 19 A model for interlanguage phonology, pp.101-124.

7) Beebe, L.M. 198 Mythabout interlanguage phonology pp.51-61.

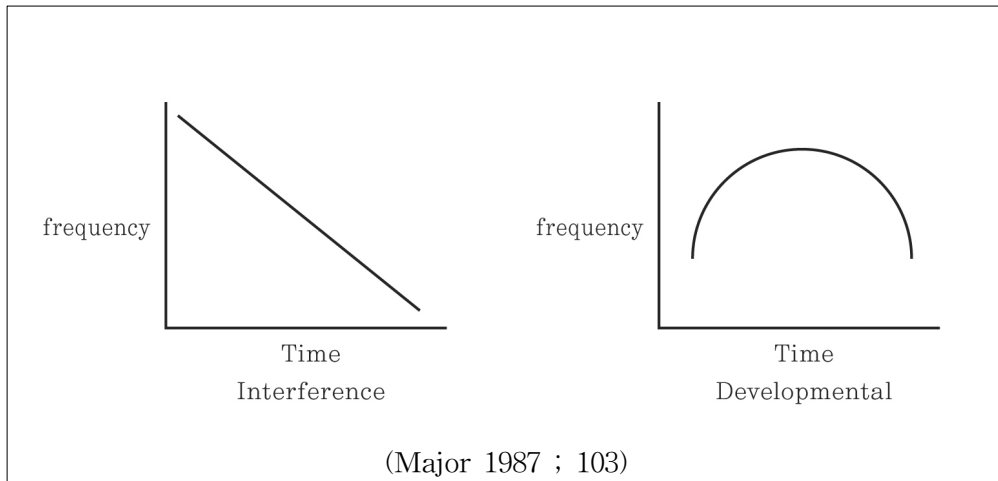


図1) : Relationship of interference and developmental processes to time
(時間軸に対する干渉と発達的プロセスの関係)

Sekiya(1991)⁸⁾は、米国に在住する日本人子女の英語音声習得過程の横断的研究(さまざまな発達段階にある学習者からデータを集めて、発達過程を推測する研究)を行い、Majorのモデルが第二言語の言語学習環境における子供の音声習得についてもあてはまることを示した。また、Sekiyaの研究では、第二言語の単語が第一言語にも借用語として存在する場合(例：日本語話者にとって英語の“milk”)、第一言語発音の影響が根強く残り、その語の発音の近似化に障害となることが指摘されている。

Corder(1975)⁹⁾は誤り分析の手順について、次のように分けている。

- 1) 学習者の第二言語、第一言語、第二言語の習熟度(proficiency)、年齢などの要因を統一した上での、スピーキングやライティングのデータ収集。
- 2) データに含まれる誤りの確認。
- 3) 誤りの分類。
- 4) 誤りの説明。
- 5) 誤りの評価など。

まず、1)でのデータの収集は、生徒にスピーキングやライティングを一定時間内に自由に行わせる方法と、質問に答えさせるなど、制約を加えて行わせる方法によって行われる。1)のデータ収集後に行う2)でのデータに含まれる誤りの確認において、誤りと間違いを区別する基準となるのは、Corderの定義に従えば、間違いは頻度がかなり低く、規則性がないと

8) Sekiya,Y199The acquisition of English phonology byJapaneschildren learning English in naturalisti settings.

9) Corder,SP197Error anaiysisInterlanguage and Second Language Acquisition,p.208

いうことである。次の3)と4)については、第一言語の転移や発達上のあやまり、過剰一般化などがこれにあてはまる。5)を行うのは、生徒の誤りに的確に対処し、習得を促すためのものである。

Corderの誤り分析の方法についての問題点を指摘すると、まず1)のようなデータは習得過程の一時点を反映するだけで全体的な輪郭はわからない。次の2)と3)では明確な基準の欠如があげられる。したがって、これまで述べてきた問題点をふまえて、本研究では韓国語を第一言語とする学習者における日本語学習者の言いあやまり分析を、次のような点に重点をおいて行う。

- (1) 韓国語を第一言語とする学習者の日本語発音のどのような音声環境(語頭・語中尾、短文)が、日本語発音の不自然さにもっとも影響を与えるのか。
- (2) 韓国語を第一言語とする日本語学習者のインターランゲージの日本語音声体系に共通する特徴は何か。
- (3) 日本語音声の習得上、日本語の不自然さが一番高い項目と、その日本語の不自然さをもっとも高い相関関係があるのは、どのような日本語の発音であるか。
- (4) 韓国語を第一言語とする日本語学習者の第一言語からの影響とは別に、言語の普遍的特性(有標性)が日本語音声の習得にどのような影響を与えるのか。ここでは、有標性(世界の諸言語においてある言語的要素が他の要素より基本的かつ自然で、使用頻度が高いとき、その要素を「無標」とし、他の要素を「有標」とする)の概念と本研究の第3章での対照分析と組み合わせ、言いあやまりの仮説に基づいた分析を行う。

このような問題意識に基づき、それぞれ次のような調査、分析を行う。

(1)では、柳(1982)¹⁰⁾での韓国語と日本語の対照分析と言いあやまり仮説に基づいて分析する。このような研究が発音指導や矯正の際に何を優先的にとり扱えばよいかに関して調査、分析する。

(2)では、様々な発達において具体的にどのようなプロセスや制約が、韓国語を第一言語とする日本語学習者のインターランゲージ音声体系を形成しているのかを調べる。ここでは、インターランゲージ音声体系の発達過程を第一言語干渉(言語間の誤り)と発達上のプロセス(developmental processes: 近似化、過剰一般化、第一言語習得プロセスなど)の影響力の変化で説明することが必要とされる。インターランゲージ分析では、言いあやまりの原因を探る場合、学習者のパフォーマンスを統合的に分析する。また、学習者の「できない面」だけでなく「できる面」にも光をあて、学習者が誤りとして産出するものだけでなく、学習者が産出しない非エラー(誤答回避)を考慮することは、言語学習に介入する

10) 柳京子198)「日本語と韓国語の音韻体系の対照言語学-韓国語を第一言語とする学習者に対する日本語音声指導の基礎論として-」

様々なストラテジーを明らかにする上できわめて重要な側面となる。

(3)では、音声習得度と日本語発音の不自然さとの間の相関関係を調べる。

(4)では、Eckmanの有標性の概念を加えて、言いあやまり仮説と組み合わせて分析する。

以下では、以上のような言いあやまり分析に基づいて、韓国語を第一言語とする学習者における言いあやまりの調査と分析を行う。

3. 日本語子音(無声音と有声音)の言いあやまり調査と分析

ここでは、韓国人における日本語音声の中で子音(無声音, 有声音)について聴覚的, 音声(調音)学的な特徴にその焦点をおき, 韓国語を第一言語とする学習者が日本語を話す(読む)ときに起こる日本語の言いあやまりについて調査を行い, その分析を行った。この調査分析の結果から, 韓国での日本語音声教育方策を統合的に立てるための基礎的資料を得ることも, この研究の一つの目的とするものである。

3.1 調査方法

○ 被調査者

調査対象については, 韓国の祥明大学校の日語教育学科の学生で, 学年ごと(1年生から, 4年生まで)に各10名, 計40名を無作為に抽出した。

3.2 調査手続き

○ 記録方法

調査資料の作成については, 祥明大学校の語学実験室でオリエントTEAC R666XカセットテープレコーダーとAT 811 AUDIO TECHNICAを使用した。

○ 分析方法

筑波大学大学院の言語教育実験室で博士課程の教育学研究科の人文科教育学領域の日本人学生9名に調査したのを聞いてもらい, それぞれにおける全体的な不自然さと単語(語頭, 語中尾, 短文)の不自然さについて5段階で評価してもらった。これらを別々に集計し, その結果を比較検討し, 最終的な調査結果をまとめたものである。

ここではおもに, (1)子音(無声音と有声音)の項目での平均と相関を出した。計量の方法は, 音声言語および精神物理学の分野ですでにその妥当性が実験的に確認されている, 9点法のEqual appearing intervalsと呼ばれるものを用いた(Mihihan, 1958)¹¹⁾。

3.3 調査資料

本調査のデータは、日本語(東京方言)の音声特性に基づき、韓国語を第一言語とする学習者にとって困難であると予測される子音の問題に関するものである。非調査者に提示した文は、(1)子音(無声音と有声音：「カ行とガ行」<10文>、「サ行とザ行」<20文>、「タテトダデド」<12文>、「パ行とバ行」<18文>)、(2)子音(「シとヒ」<11文>、「ストツ」<11文>、「チとツ」<12文>、「ラとダ」<15文>)である。この資料は最後の資料編に示した¹²⁾。

3.4 調査結果の分析

(1) 子音(無声音と有声音：「カ行とガ行」, 「サ行とザ行」, 「タテトダデド」, 「パ行とバ行」)「カ行とガ行」の二つの日本語の子音の区別について1年生から4年生までの40人の被調査者の録音データを9人の日本人に聴取させ、評価してもらった結果を下の表1)に示した。表1)をみると単語の例文5)の「こい<恋>」[koi]と「ごい<語彙>」[goi](2.96)の場合では、母音[o]の影響で不自然さがもっとも高く現われたように思われる。次に、短文の例文2)の「銀河[ginga]は金貨[kinka]と銀貨[ginka]を散りばめたようだ」(3.53)の例文の場合、柳(1982)¹³⁾によると、日本語の有声破裂音[g]と[k]が語頭、語中尾に現われたため、韓国語の無声-無気破裂音[k]と有声-有気破裂音で発音されたとみられる。これは、単語の場合も同様である。

中東(1998)¹⁴⁾は、韓国語第一言語話者の英語音声と日本語音声の聞き取り・発音調査の結果から韓国語を第一言語とする日本語学習者は、日本語語頭有声破裂音を激音で発音するものが多いと述べている。また、日本語語頭有声破裂音を激音で発音すると日本語としては気音が強すぎ、平音として発音する場合には、ときに有声音に聞きとられる場合がある。韓国語を第一言語とする日本語学習者にとって日本語無声破裂音と有声破裂音の識別は、語中より語頭のほうが困難であるという調査結果が出ている。これらの調査結果は本研究の分析結果でも同様の傾向がみられる。

11) 2種類の量X, Yの間の相関を次のような量rで与える方法である。

$$r = \frac{\sum(X_i - \bar{X})(Y_i - \bar{Y})}{\sqrt{\sum(X_i - \bar{X})^2} \sqrt{\sum(Y_i - \bar{Y})^2}}$$

$$\sqrt{\sum(X_i - \bar{X})^2} \sqrt{\sum(Y_i - \bar{Y})^2}$$

X_i, Y_i はそれぞれX, Yの平均値である。rが1のとき、XとYとの相関はもっとも大きく、0のとき、相関はまったくない。

Mihan, H. R.(1958) A development of Reading-Scale Technique Based upon Informal, Oral Descriptions for Measuring Foreignisms to American Speech-, Masters thesis, Ohio State University.

12) 今田滋子(198)『教師用日本語教育ハンドブック 発音』, 12頁13頁。

13) 注10)と同様

14) 中東靖恵(199)「韓国人の英語音声と日本語音声」, 72頁-82頁。

表1) 「カ行とガ行」における不自然さの程度(1~5)に関して単語，短文とに分けての例文ごとの評価結果。(数値は5段階評価による平均値である。以下同様)

例 文		1年生	2年生	3年生	4年生	全学年
単語	1)	3.15	2.78	3.10	2.78	2.95
	2)	2.80	2.50	2.42	2.70	2.61
	3)	3.18	2.98	3.10	3.08	3.08
	4)	3.13	2.78	2.17	2.80	2.72
	5)	3.13	2.92	2.70	3.07	2.96
短文	1)	3.48	2.58	2.60	2.72	2.84
	2)	3.98	3.37	3.38	3.38	3.53
	3)	3.75	3.23	2.90	3.33	3.30
	4)	2.83	3.45	3.20	3.02	3.38
	5)	3.95	3.47	3.00	3.12	3.39

次の表2)の「カ行とガ行」の二つの日本語の子音の区別について学年ごとにみると、1年生から3年生までは不自然さが少なくなるが、3年生(2.86)から4年生(3.00)になるとまた、不自然さが大きくなる傾向が示される。この傾向は、Major(1987)のインターランゲージ音声体系の発達上のプロセスに当てはまる。すなわち、発達上のプロセスでは日本語発音の「カ行とガ行」の二つの子音の区別についての不自然さが初期には徐々に減少し、中期にはもっとも少なくその後、ふたたび高くなっていく現象である。

また、Eckman(1981)の有標性の概念によると日本語の「カ行とガ行」は、韓国語を第一言語とする日本語学習者には有標性が高いといえることができる。韓国語には無声音と有声音の区別が意味に関与していないために、「カ行とガ行」は、韓国語を第一言語とする日本語学習者には非常に難しいのである。また、「カ行とガ行」を表2-1)と図2)でさらに細かく分けた語頭、短文でも3年生(2.70、3.02)から4年生(3.02、3.12)になると、不自然さが強くなる傾向がみられる。

表2) 「カ行とガ行」における不自然さの程度(1~5)に関しての学年ごとの評価結果。

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.90	3.30	3.50	2.70
2	2.70	3.00	2.00	3.90
3	3.40	3.20	2.80	2.10

4	3.30	2.90	3.20	2.30
5	3.10	3.30	2.70	3.80
6	3.80	2.50	3.40	3.20
7	3.70	2.40	2.30	2.30
8	3.20	3.40	2.60	4.60
9	2.80	3.30	3.20	2.30
10	4.60	2.70	3.00	2.80
平均値	3.44	3.01	2.86	3.00

表2 1) 「カ行とガ行」を単語，短文とに分けての学年ごとの評価結果

被調査者	1年生		2年生		3年生		4年生	
	単語	短文	単語	短文	単語	短文	単語	短文
1	3.35	4.45	3.15	3.40	3.35	3.55	2.55	2.85
2	2.40	2.95	2.60	3.40	2.10	1.90	3.60	4.20
3	2.70	4.15	2.90	3.50	2.75	2.75	1.70	2.45
4	2.95	3.65	2.50	3.30	2.90	3.50	2.05	2.45
5	2.40	3.75	3.20	3.50	2.35	2.95	3.65	3.95
6	3.55	4.00	2.20	2.75	2.65	4.15	3.20	3.25
7	3.20	4.10	2.50	2.30	2.20	2.35	2.40	2.25
8	3.10	3.35	3.20	3.65	2.80	2.45	4.75	4.50
9	2.55	2.95	2.90	3.80	3.10	3.30	2.50	2.20
10	4.55	4.60	2.75	2.60	2.80	3.25	2.45	3.05
平均値	3.08	3.80	2.79	3.22	2.70	3.02	2.89	3.12

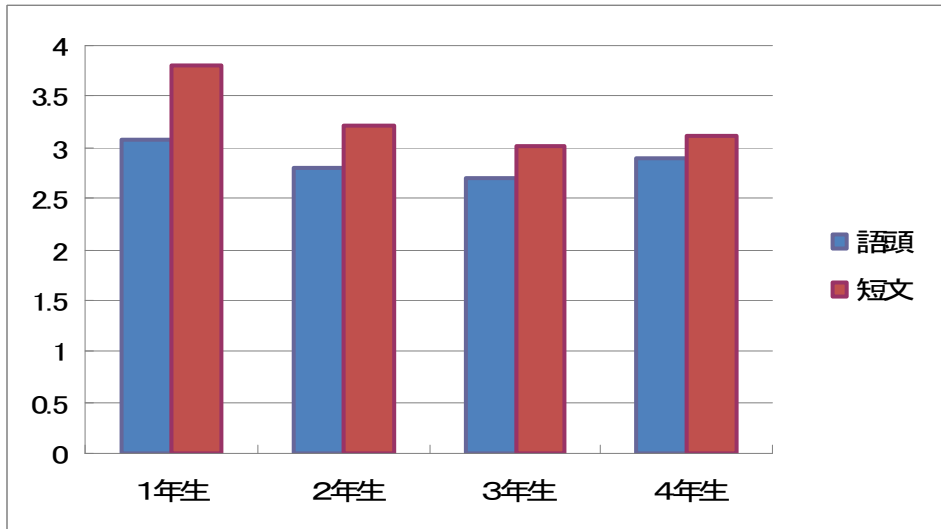


図2) 「カ行とガ行」を単語、短文とに分けての学年ごとの評価結果(平均値)

「サ行とザ行」の二つの日本語の子音の区別について例文ごとに評価していただいた結果を、次の表3)に示した。表3)をみると「サ行とザ行」の二つの日本語の子音の区別では、語頭の例文2)の「しかい〈司会〉」[jikai]と「じかい〈次回〉」[dʒikai] (2.88) の場合は、両言語の対照分析によると、日本語の有声破擦音[dʒ]が語頭に現われた場合、韓国語の無気破擦音[tʃ]で発音されるのに当てはまる。語中尾の場合は例文4)の「しせん〈視線〉」[ʃiseN]と「しぜん〈自然〉」[ʃidzeN](3.06)の場合は、撥音[N]の影響があったと考えられる。

また、語中尾の例文5)の「ふそく〈不足〉」[φʷsokʷ]と「ふぞく〈附属〉」[φʷdzokʷ] (3.01)では、柳(1982)¹⁵⁾の両言語の対照分析研究では韓国語を第一言語とする日本語学習者が、日本語の[sal][so]を発音するとき、[tʃa][tʃo]と発音する傾向があるということに裏付けているのである。ただし、語中尾の例文1)より語中尾の例文5)の不自然さが高くなったのは、母音[a]より母音[o]の影響が不自然さに多くかかわっているということが考えられる。

表3) 「サ行ザ行」を語頭、短文とに分けての不自然さの例文ごとの評価結果

例文	1年生	2年生	3年生	4年生	全学年
語頭 1)	2.93	2.55	2.65	2.38	2.63
2)	3.00	2.77	3.28	2.48	2.88

15) 注10)と同様

	3)	2.73	2.50	2.57	2.50	2.58
	4)	2.70	2.85	2.90	2.47	2.73
	5)	2.92	3.35	2.70	2.17	2.79
語中尾	1)	2.60	2.85	2.63	2.33	2.60
	2)	2.80	2.68	2.73	2.40	2.65
	3)	2.73	2.83	2.87	2.50	2.73
	4)	3.15	2.93	3.18	3.00	3.06
	5)	3.32	3.08	2.83	2.80	3.01
短文	1)	2.73	2.78	2.42	2.38	2.58
	2)	3.42	3.68	3.17	2.82	3.28
	3)	3.48	2.93	2.63	2.75	2.94
	4)	3.67	2.70	3.27	3.13	3.19
	5)	3.47	2.82	2.65	2.60	2.89
	6)	3.40	2.68	2.55	2.72	2.84
	7)	3.25	2.72	2.88	2.70	2.89
	8)	3.10	3.07	3.25	3.37	3.20
	9)	3.30	2.92	2.97	2.83	3.01
	10)	3.50	3.13	2.95	2.83	3.10

短文の場合は例文2)の「先妻[sensai]の買った洗剤[sendzai]がまだある」(3.28)、例文8)の「自然[jidzeN]と視線[jiseN]があった」(3.20)という例文の場合に不自然さがもっとも高く現われた。この傾向は撥音の影響が大きいことが考えられるが、短文の中でも、同じ撥音の例文1)の「あの産業は残業が多い」(2.58)と例文7)の「船員は全員無事だった」(2.89)の場合は不自然さが低くなっている。これは「サ行とザ行」の場合、語頭より語中尾のほうの発音が難しいことを表しているのである。とくにザ行について中東(1998)¹⁶⁾は、韓国語を第一言語とする学習者にとって、この発音は教育上かなり問題が多いと指摘している。

次の表4)の「サ行とザ行」では、高学年になるにつれて不自然さが少なくなるという傾向がみられる。さらにこれを細分化した表4-1)、図3)をみると、短文と語中尾では全体的に学年が上がるにつれて不自然さが少なくなる傾向がみられる。ただし、語頭だけ2年生から3年生になるときに、とくに不自然さがすこし大きくなる傾向がみられる。この傾向は、

16) 注10)と同様。

Majorのインターランゲージの音声体系の第一言語干渉(言語間の誤り)に当てはまる。すなわち、日本語の「サ行とザ行」の二つの子音の区別についての不自然さが、発達過程の初期には第一言語の干渉が優勢で高くなっているが、このような現象が徐々に少なくなっていくのである。

表4) 「サ行とザ行」の学年ごとの評価結果

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.40	2.80	2.90	2.60
2	3.20	2.90	2.50	2.70
3	3.00	3.00	2.80	2.80
4	2.90	2.90	2.90	2.30
5	3.00	3.00	2.70	2.90
6	3.20	2.70	2.90	2.60
7	3.00	2.40	2.70	2.50
8	3.00	3.30	2.60	3.20
9	2.80	3.00	3.10	2.10
10	3.60	3.00	3.30	2.80
平均値	3.11	2.89	2.85	2.66

Eckmanの有標性を加えると日本語の子音の「サ行とザ行」は韓国語を第一言語とする日本語学習者には、有標性が高い(韓国語には無声と有声の区別がないから)といえることができる。しかし、「サ行とザ行」の学年ごとの評価結果をみると、学年が上がるにつれて全体的に自然になっていく。この結果から、韓国語を第一言語とする日本語学習者の「サ行とザ行」の音声教育は、ある程度定着しているといえることができる。

表4 1) 「サ行とザ行」を語頭、語中尾、短文とに分けての学年ごとの評価結果

被調査者	1年生			2年生			3年生			4年生		
	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文
1	3.15	3.15	3.65	2.60	2.75	2.88	2.75	2.35	3.20	2.20	2.70	2.78
2	3.00	3.00	3.42	2.95	2.75	2.90	2.40	2.40	2.55	2.80	2.60	2.72
3	2.55	3.00	3.20	3.00	3.00	3.00	2.60	2.80	3.00	2.65	3.10	2.78
4	2.65	3.00	3.15	2.80	3.00	2.95	3.10	3.10	2.78	2.30	2.35	2.35

5	2.60	2.55	3.25	2.60	2.95	3.13	2.50	2.75	2.83	2.65	2.80	3.03
6	2.75	3.00	3.50	2.55	2.65	2.80	3.10	2.90	2.83	2.25	2.70	2.75
7	2.60	3.15	3.15	2.15	2.60	2.42	2.75	3.20	2.50	2.05	2.40	2.78
8	2.85	2.90	3.25	3.10	3.15	3.40	2.40	2.45	2.80	3.25	1.70	2.42
9	2.25	2.75	3.17	3.20	2.90	3.00	3.10	3.20	3.10	1.75	1.70	2.42
10	4.15	2.45	3.58	3.10	2.95	2.95	3.50	3.30	3.17	2.10	2.70	3.22
平均値	2.85	2.92	3.33	2.80	2.87	2.94	2.82	2.85	2.88	2.40	2.61	2.81

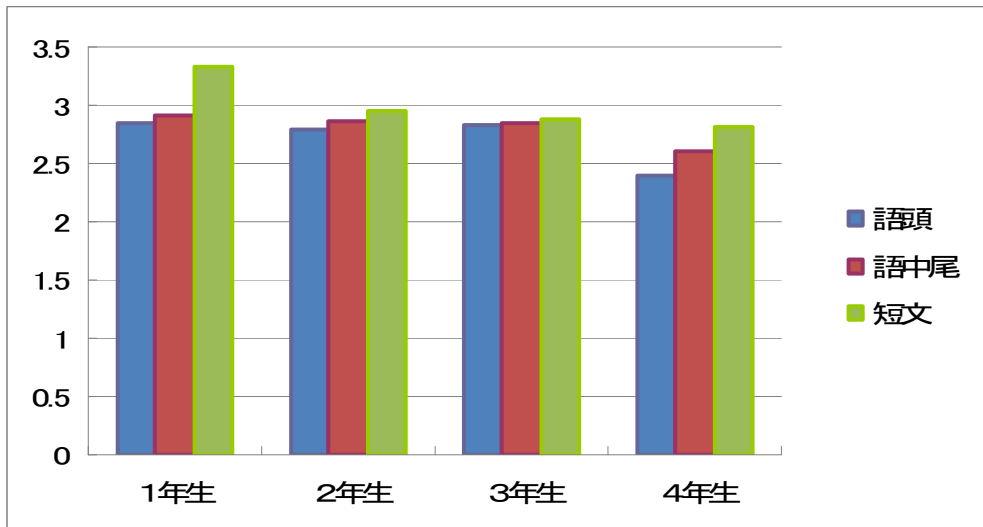


図3) 「サ行とザ行」を語頭、語中尾、短文とに分けての学年ごとの評価結果(平均値)

「タテトダデド」の二つの子音の区別について1年生から4年生まで例文ごとに、評価した結果を次の表5)に示した。表5)をみると語頭の例文1)「たいかく〈退学〉」[taigakɔ]と「だいがく〈大学〉」[daikakɔ](3.14), 語中尾の例文1)「いたい〈遺体〉」[itai]と「いだい〈偉大〉」[idai](2.55)、短文の例文2)「たんだい〈短大〉」[tandai]と「だんたい〈団体〉」[dantai](3.52)であり、タとダの区別が一番難しい発音であるという結果である。これは、「タテトダデド」の中で韓国語を第一言語とする日本語の学習者には、タとダの発音の区別がもっとも難しいということである。

対照分析研究でも日本語の破裂音[t][d]は、韓国語を第一言語とする日本語学習者には難しいと予測された(比較的の全学年の平均も高い)が、タとダの不自然さがとくに高いの

は、なぜであろうか。これは、Jespersen(1976)¹⁷⁾が聴取による分析の中で述べている、母音[a]のソリシティが大きいため、タとダの発音が強く聴こえて、もっとも不自然に評価された可能性もあると考えられる。いずれにせよ、これらについては今後緻密な実証研究が必要である。

表5) 「タテトとダデド」の例文ごとの評価結果

例文	1年生	2年生	3年生	4年生	全学年	
語頭 1)	4.10	3.20	2.67	2.58	3.14	
	2)	4.02	2.90	2.43	2.80	3.04
	3)	3.95	3.13	2.47	2.80	3.09
語中尾 1)	3.05	2.43	2.37	2.35	2.55	
	2)	2.90	2.45	2.28	2.42	2.51
	3)	2.87	2.12	2.02	1.87	2.23
短文 1)	3.75	3.20	2.55	3.22	3.18	
	2)	4.03	3.33	3.02	3.70	3.52
	3)	4.18	3.20	2.80	3.02	3.30
	4)	3.50	3.00	3.17	3.07	3.19
	5)	3.63	2.70	2.97	3.20	3.13
	6)	3.38	2.53	2.90	2.88	2.92

次の表6)と図4)の「タテトとダデド」の場合では、3年生(2.64)から4年生(2.83)になると、再び不自然さが強くなる傾向がみられる。また、これをさらに細かく語頭(2.53、2.73)、語中尾(2.22、2.22)、短文(2.88、3.18)とに分けて表18-1)でも、同じような現象が現われている。この傾向は、インターランゲージ音声体系の発達上のプロセスに当てはまる。すなわち、発達上のプロセスでは日本語発音の「タテトとダデド」の二つの子音の区別についての不自然さが初期に徐々に減少し、中期にもっとも少なくその後ふたたび高くなっていく現象である。

また、有標性の概念では、日本語発音の「タテトとダデド」は韓国語を第一言語とする日本語学習者には有標性が高いといえることができる。韓国語には無声音と有声音の区別が意味に関与していないため、「カ行ガ行」と同じように韓国語を第一言語とする日本語学習者にとって、これらは非常に難しいのである。また、これらの発音は柳(1982)¹⁸⁾の両言語の対照分析の結果でも誤りが生じやすい発音であると考えられたものである。

17) 日本音声学会編(1976)『音声学大辞典』, 514。

表6) 「タテとダデ」の学年ごとの評価結果

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.60	2.80	3.30	2.70
2	3.30	2.90	2.00	3.00
3	3.40	3.30	3.00	3.10
4	2.70	3.00	2.50	2.20
5	3.20	2.80	2.00	3.80
6	3.80	2.10	2.80	2.40
7	4.30	2.30	2.10	2.30
8	3.20	3.30	2.40	3.70
9	3.40	3.40	3.80	1.90
10	4.20	2.60	2.30	3.30
平均値	3.61	2.85	2.64	2.83

表6 1) 「タテとダデ」を語頭、語中尾、短文とに分けての学年ごとの評価結果

被調査者	1年生			2年生			3年生			4年生		
	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中	短文
1	4.42	2.92	3.58	3.00	2.33	2.83	3.42	2.50	3.20	2.25	2.00	3.25
2	3.58	3.00	3.38	3.17	2.33	2.96	1.50	1.58	2.55	3.42	2.42	3.04
3	3.33	2.83	3.75	3.75	2.83	3.21	3.42	2.08	3.00	2.58	2.17	3.75
4	4.25	2.75	3.92	3.83	2.58	2.83	2.58	2.00	2.78	2.75	1.67	2.13
5	3.33	2.58	3.46	2.33	2.33	3.25	1.92	1.92	2.83	4.42	2.50	4.17
6	4.67	2.75	3.88	2.42	1.75	2.17	2.25	2.33	2.83	1.67	2.00	2.92
7	4.25	3.17	4.79	2.17	1.83	2.67	1.75	2.00	2.50	2.67	2.00	2.17
8	3.67	2.67	3.17	2.83	2.83	3.83	2.58	2.58	2.80	3.33	3.08	4.21
9	3.92	2.92	3.42	3.75	2.33	3.71	4.42	3.00	3.10	1.50	1.83	2.21
10	4.83	3.83	4.08	3.50	2.17	2.46	1.42	2.25	3.17	2.67	2.50	4.00
平均値	4.03	2.94	3.74	3.07	2.33	2.99	2.53	2.22	2.88	2.73	2.22	3.18

18) 注10)と同様

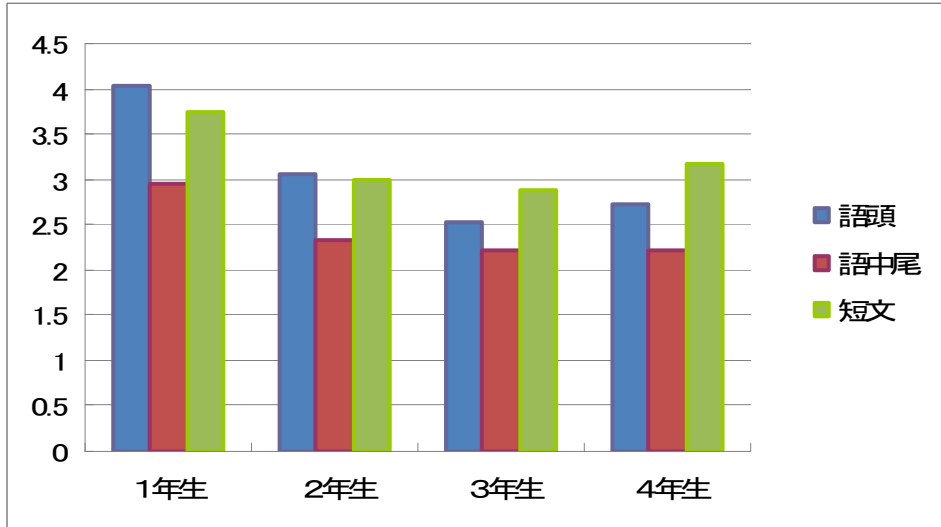


図4) 「タテトダデド」を語頭、語中尾、短文とに分けての学年ごとの評価結果(平均値)

「ば行とぱ行」の二つの子音の区別については、例文ごとに評価してもらった結果を下の表7)に示した。表7)をみると語頭の例文5)の「ポール[po:rɔ̃]」と「ボール[bo:rɔ̃]」(3.56)の場合は、母音[o]の影響と[r]の影響で不自然さがもっとも高くなった。日本語の子音[r]は、弾音だから弾くように発音しなければならないのに、韓国語の子音[r]は、流音として発音するために不自然さが高く評価されたのではないだろうか。

語中尾の例文3)の「オープン[o:puN]」と「オーブン[o:buN]」(2.88)の場合と、短文の例文5)の「ベンチ[bentʃi]」と「ペンチ[pentʃi]」(3.79)の場合でも、韓国語の影響であるとみられる。これは、日本語では二つとも4拍として発音されているのに、韓国語では「오편[opun]」と「오븐[obun]」、「벤치[pentʃi]」と「뽀찌[P'en tʃi]」の2拍として発音されるからである。とくに、語中尾(2.88)に比べて短文(3.79)のほうの不自然さが高いのは、日本語の場合は「ペンチ[pentʃi]」と無声音で発音するのに、韓国語の場合は「뽀찌[P'en tʃi]」と激音で発音するように、第一言語の影響が強かったと考えられる。

表7) 「パ行とバ行」を例文ごとに評価させた結果

例文	1年生	2年生	3年生	4年生	全学年	
語頭	1)	3.87	3.60	2.97	3.07	3.38
	2)	3.25	3.38	2.85	2.80	3.07
	3)	3.40	3.08	2.90	2.65	3.01

	4)	3.67	3.35	2.78	2.92	3.18
	5)	4.23	3.80	3.42	2.78	3.56
語中尾	1)	2.85	2.60	2.37	2.38	2.55
	2)	3.15	2.50	2.18	2.33	2.54
	3)	3.50	3.00	2.55	2.48	2.88
	4)	3.10	2.58	2.23	2.20	2.53
	5)	3.47	2.73	2.70	2.33	2.81
短文	1)	4.07	4.18	3.47	3.27	3.75
	2)	3.38	2.83	2.52	2.35	2.77
	3)	3.67	3.37	2.82	2.40	3.07
	4)	3.35	2.88	2.77	2.88	2.97
	5)	4.30	4.05	3.45	3.37	3.79
	6)	3.62	2.63	2.65	2.47	2.84
	7)	3.77	3.22	3.57	2.93	3.38
	8)	3.53	2.75	2.77	2.40	2.86

次の表8)と図5)の「パ行とバ行」では、高学年になるにつれて不自然さが少なくなるという傾向がみられる。さらに、これを細分化した表8-1)をみると全体的に学年が上がるにつれて不自然さが少なくなる傾向がみられる。この傾向は、Majorのインターランゲージ音声体系の第一言語干渉(言語間の誤り)に当てはまる。すなわち、日本語発音の「パ行とバ行」の二つの子音の区別についての不自然さが発達過程の初期には第一言語干渉が優勢で高くなっているが、この現象が徐々に少なくなっていくのである。

表8) 「パ行とバ行」の学年ごとの評価結果

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.50	2.80	3.30	2.50
2	3.20	2.70	2.50	3.10
3	3.60	3.40	3.00	2.40
4	2.70	3.40	3.20	2.20
5	3.40	3.60	2.10	3.30
6	3.30	2.70	2.50	2.30

7	3.70	3.00	2.90	2.10
8	3.40	3.40	3.30	3.60
9	3.30	3.10	3.20	1.80
10	4.50	3.30	2.30	2.30
平均値	3.57	3.14	2.83	2.67

表8-1) 「パ行とバ行」を語頭，語中尾，短文とに分けての学年ごとの評価結果

被調査者	1年生			2年生			3年生			4年生		
	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文
1	3.80	2.90	3.66	2.85	2.50	2.94	4.25	2.25	3.28	1.85	2.10	3.13
2	2.90	3.00	3.50	2.80	2.60	2.72	2.30	2.00	3.00	3.70	2.20	3.22
3	3.35	2.85	4.13	3.65	3.00	3.59	3.15	2.40	3.34	2.05	2.45	2.53
4	3.65	3.75	3.75	3.75	2.85	3.59	4.20	2.45	3.13	2.10	2.00	2.28
5	3.80	2.80	3.53	4.10	3.15	3.56	2.00	2.25	2.16	4.00	2.80	3.25
6	3.55	3.00	3.38	2.80	2.15	2.88	1.95	2.25	2.97	4.00	2.70	3.34
7	4.10	3.20	3.78	3.30	2.50	3.06	3.05	2.75	3.25	1.95	2.35	2.09
8	3.90	3.15	3.34	3.85	2.95	3.44	3.80	2.75	3.25	4.30	3.10	3.53
9	3.25	2.95	3.53	3.60	2.55	3.03	3.45	2.60	3.47	1.90	1.55	1.91
10	4.55	4.55	4.53	3.70	2.55	3.56	1.70	2.35	2.56	2.60	2.15	2.31
平均値	3.69	3.22	3.71	3.44	2.68	3.24	2.99	2.40	3.01	2.85	2.34	2.76

また、Eckmanの有標性の概念によると日本語の子音「パ行とバ行」は、韓国語を第一言語とする日本語学習者には有標性が高いといえる。柳(1982)¹⁹⁾の両言語の分析結果によると、無声音パ行と有声音バ行は難しいことが予測されている。しかし、分析結果をみると、韓国語を第一言語とする日本語学習者には「パ行とバ行」は、前述した「サ行とザ行」と同様にある程度定着しているようにみられる。

19) 注10)と同様

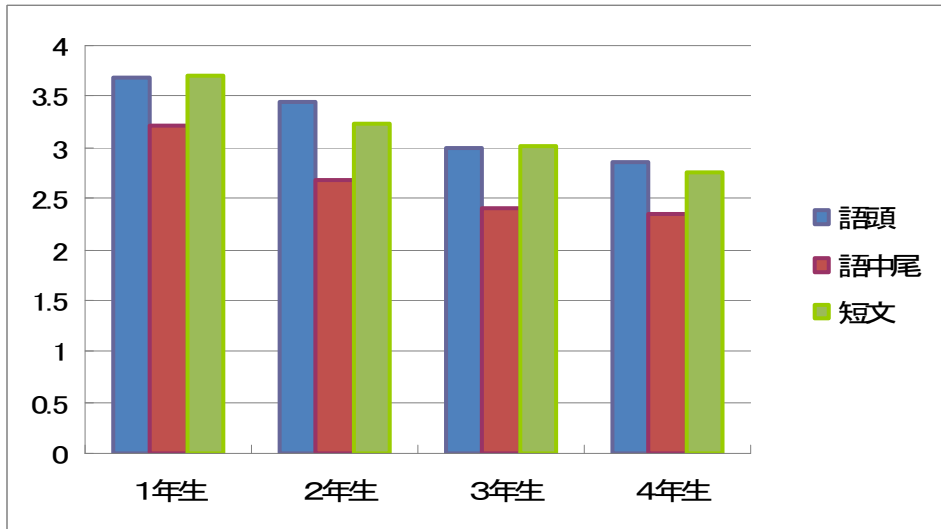


図5) 「パ行とバ行」を語頭、語中尾、短文とに分けての学年ごとの評価結果
(平均値)

次の表9)と図6)の1年生から4年生の日本語の子音の無声音と有声音(「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテとダデド」「パ行とバ行」)の全体についてみると、一番不自然さが高いのは「カ行とガ行」であり、一番不自然さが低いのは「サ行とザ行」である。全体の子音との不自然さとの相関は「カ行とガ行」が一番高く($r=0.89$)、これら4項目の中では「カ行とガ行」の不自然さが子音全体の不自然さに一番影響を与えていることを表している。相関が一番低いのは、「サ行とザ行」(0.81)、「パ行とバ行」(0.81)であり、これはこの二つの項目が子音全体の不自然さに一番影響を与えていないことを表している。これをさらに細かくわけたのが表21-1)と図14-1)である。ここでは、もっとも不自然なのが「カ行とガ行」の短文(3.29)であり、一番自然なのが「タテとダデド」の語中尾(2.43)である。

相関の場合は「タテとダデド」の語中尾と子音全体との相関がもっとも高く($r=0.83$)、「パ行とバ行」の語頭と子音全体との相関がもっとも低い($r=0.54$)。すなわち、「パ行とバ行」の中でも、とくに「パ行とバ行」の語頭の不自然さは全体の不自然さにもっとも影響を与えないことを表している。

表9) 無声音と有声音(「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテトとダデド」「パ行とバ行」)の評価結果

	カ行とガ行	サ行とザ行	タテトとダデド	パ行とバ行
平均値	3.07	2.88	2.98	3.05
相関値	0.89	0.81	0.87	0.81

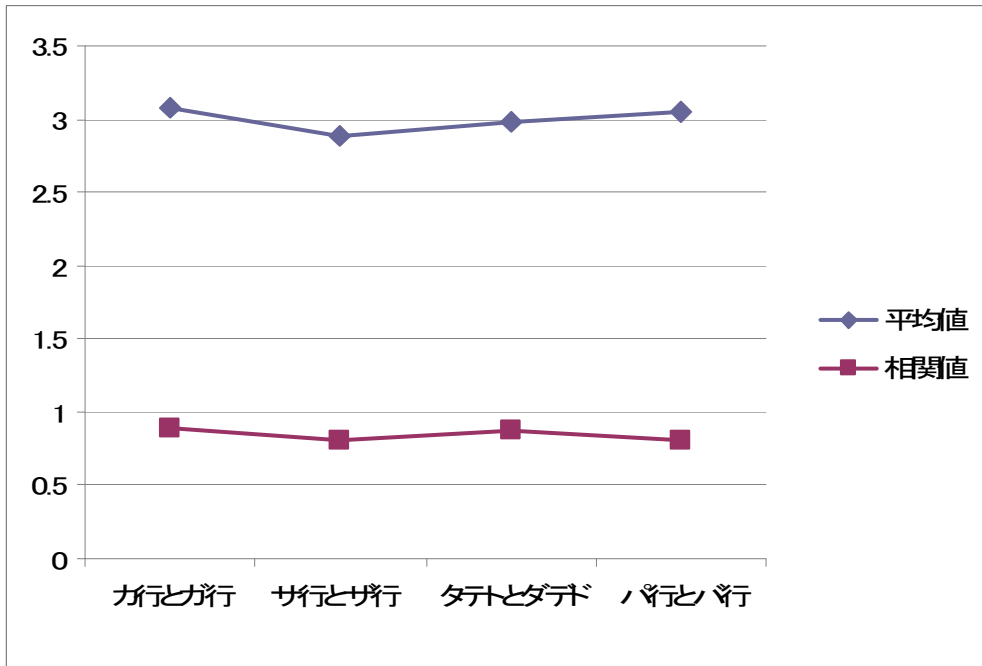


図6) 無声音と有声音(「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテトとダデド」「パ行とバ行」)の評価結果(平均値, 相関値)

表9-1)無声音と有声音(「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテトとダデド」「パ行とバ行」を語頭, 語中尾, 短文とに分けての評価結果

	カ行とガ行		サ行とザ行			タテトとダデド			パ行とバ行		
	語頭	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	短文
平均値	2.86	3.29	2.72	2.81	2.99	3.09	2.43	3.21	3.24	2.66	3.18
相関値	0.68	0.67	0.70	0.57	0.70	0.68	0.83	0.70	0.54	0.69	0.56

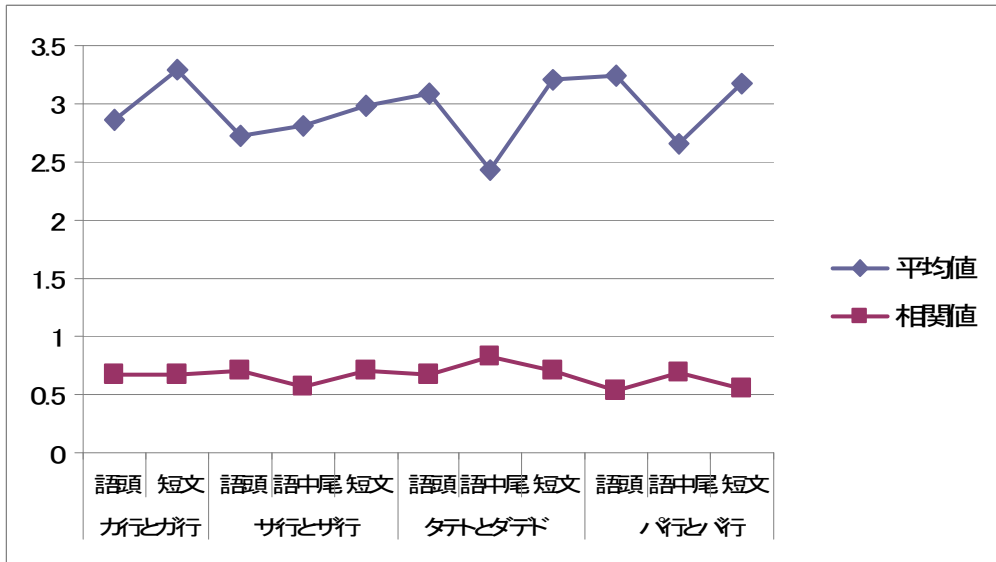


図6-1) 無声音と有声音(「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテとダデド」「バ行とバ行」)に対する語頭、語中尾、短文の評価結果(平均値、相関値)

(1)-1 調査結果のまとめ

日本語の子音(無声音と有声音:「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテとダデド」「バ行とバ行」)の言いあやまりの調査結果の分析をまとめると次のようになる。

1. 韓国人の日本語発音のどのような音声環境が、発音の不自然さにもっとも影響を与えるのか。
 - 1) カ行とガ行では、単語5)「こい[koi]」と「ごい[goi]」、短文2)「銀河[ginga]は金貨[kinka]と散りばめたようだ」である。
 - 2) サ行とザ行の場合は、語頭2)「しかい[jikai]」と「じかい[dzikai]」、語中尾4)「しせん[fiseN]」と「しぜん[fidzeN]」、短文2)「先妻[sensai]が買った洗剤[sendzai]がまだある」である。
 - 3) タララトとダラドの場合では、語頭1)「たいかく[taigakω]」と「だいかく[daigakω]」、語中尾1)「いたい[itai]」と「いだい[idai]」、短文2)「短大[tandai]の団体[dantai]が支店まで市電で行った」である。
タララトとダラドの中で韓国語を母語とする日本語学習者には、日本語タとダの区別がもっとも難しい。
 - 4) バ行とバ行では、語頭5)「ポール[po:rω]」と「ボール[bo:rω]」、語中尾3)「オープン[o:pυN]」と「オーブン[o:buN]」、短文5)「ベンチ[bentʃi]の上にベンチ[pentʃi]を忘れた」である。

2. 韓国人の日本語学習者のインターランゲージ音声体系に共通する特徴はなにか。
 - 1) 第一言語干渉（言語間の誤り）では、サ行とザ行・サ行とザ行の語中尾・短文、パ行とバ行・パ行とバの語頭・語中尾・短文である。
 - 2) 発達上のプロセスでは、カ行とガ行・カ行とガ行の単語と短文、サ行とザ行の語頭、タテトとダテド・タテトとダテドの語頭・語中尾・短文である。
3. 日本語発音の習得上、不自然さが一番高い発音と、その不自然さともっとも高い相関関係があるのは、どのような発音であるか。

日本語発音の習得上カ行とガ行、サ行とザ行、タテトとダテド、パ行とバ行の中で一番不自然な項目は、カ行とガ行(3.07)、カ行とガ行の短文(3.29)である。子音の全体と不自然さとの相関の場合は、カ行とガ行($r=0.89$)・タテトとダテドの語中尾($r=0.83$)が一番高くなっていた。

4. 韓国人の日本語学習者の第一言語からの影響とは別に、言語の普遍的特性が発音に影響を与えるのか。

ここでは、有標性の概念を本研究の第3章での対照分析と組み合わせて、言いあやまりの仮説に基いた分析を行った。韓国語を母語とする日本語学習者には、日本語の無声音と有声音の区別は有標性が高いから難しいことが予測された。分析結果でも無声音と有声音の区別は、母音に比べて不自然さが高くなっていた。

このような無声音と有声音(「カ行とガ行」「サ行とザ行」「タテトとダテド」「パ行とバ行」)の分析結果は、日本語の音声教育に深く関与する重要な結果を示しているといえることができる。

4. おわりに

本研究では、日本語音声の中で子音（無声音、有声音）について聴覚的、音声（調音）学的な特徴にその焦点をおき、韓国語を第一言語とする学習者が日本語を話す（読む）ときに起こる日本語の言いあやまりについて調査を行い、その分析を行った。今後の韓国における日本語音声教育の方法改善の上では、その調査結果に示されている面がとくに重視されなければならないと思われる。

本研究では、研究対象の外におかざるをえなかった、子音の知覚心理学特性への反映の問題、子音と発話速度との関係などは、今後の課題にしておきたい。

【参考文献】

〈日本語文献〉

- .宇津木昭(2005)「朝鮮語ソウル方言におけるアクセント句：音響分析による再検討」筑波大学大学院博士論文
- .金善姫(1996)「韓国語大邱方言の韻律の研究：音響音声学的観点からの分析」筑波大学大学院博士論文
- .窪園晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店。
- .窪園晴夫(2003)「音韻の獲得と言語の普遍性」『音声研究』7巻、2号、5頁-17頁。
- .高慧禎(2005)「韓国語のアクセントに関する実験音声学的研究：音声学的アクセントの実体を探る」筑波大学大学院博士論文。
- .武田誠外、二郷美帆、益子幸江(1999)「韓国語における歯茎摩擦音の平音と濃音に関する音響音声学的研究 語頭および語中で音節末子音が先行する場合-」『音声研究』第3巻、第2号、日本音声学会、51頁-71頁。
- .武田誠外、二郷美帆、益子幸江 [2005]「韓国語における歯茎摩擦音の平音と濃音に関する音響音声学的研究(2.完) 語中で母音間の場合およびその他の場合との総括-」『音声研究』9巻、1号、日本音声学会、60頁-72頁。
- .日本音声学会編(1976)『音声学大辞典』三修社。
- .松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声」『音声研究』第3巻3号、日本音声学会。
- .柳京子(1982)「日本語と韓国語の音韻体系の対照言語学的研究 韓国語を第一言語とする学習者に対する日本語音声指導の基礎論として-」筑波大学大学院、修士論文。

〈英語文献〉

- .Beebe,L.M.(1984)Myths about interlanguage phonology. in Eliasson, S.(ed) pp.51-61.
- .Corder,S.P. (1975) Error Analysis, Interlanguage and Second Language Acquisition, LTLA(Language Teaching)Vol.8, No.4, Cambridge University Press.
- .Corder,S.P.(1981)Error Analysis and Interlanguage. Oxford University Press.
- .Dickerson,L.(1974)Internal and external patterning of phonological variability in the speech of Japanese learners of English :toward a theory of second language acquisition. Illinois University doctoral dissertation.
- .Dickerson,L.(1975)The learner's interlanguage as a system of variable rules. TESOL Quarterly, Vol.9, pp.401-408.
- .Eckman,F.R.(1981)On predicting phonological difficulty second language acquisition. Studies in Second Language Acquisition, Vol.4 No.1, pp.18-30.

- .Jakobson,Roman(1939) Les Lois phoniques du Langage enfantin et leur place dans la phonologie générale
邦訳「幼児言語の音法則」服部四郎(編・監訳)(1976)『失語症と言語学』岩波書店。
- .Jakobson,Roman(1941/68) kindersprache, Aphasie und allegemeine Lautgesetze Child Language Aphasia and Phonological Universals. TheHague: Mouton
邦訳「幼児言語, 失語症および一般音法則」服部四郎(編・監訳)(1976)『失語症と言語学』岩波書店。
- .Lavoe,W.(1972)Sociolinguistic pattern. Philadelphia, Pennsylvania University Press.
- .Major,R.C.(1987) A model for interlanguage phonology. in Ioup, G. and Weinberger, S. H.(ed), pp. 101 124.
- .Sekiya,Y.(1991)The acquisition of English phonology by Japanes children learning English in naturalistic settings. Columbia University doctoral dissertation.
- .Tarone,E.(1980)Some influences on the syllable structure of inter language phonology. IRAL(International Review of Applied Linguistics in Language Teaching) Vol.18 No.2, pp139 152.
- .Tarone,E.(1988) Variation in interlanguage. London : Edward Arnold.

〈参考資料編〉

無声音と有声音

(カ行とガ行)

(語頭)

- 1) かい<貝> 2) きん<金> 3) くち<口> 4) けんこう<健康> 5) こい<恋>
がい<害> ぎん<銀> ぐち<愚痴> げんこう<原稿> ごい<語彙>

[短文]

- 1) その貝は害がある。
- 2) 銀河は金貨と散りばめたようだ。
- 3) 口から出るのはぐちばかり。
- 4) 科学の研究に言及した。
- 5) 公害の問題で号外が出た。

(サ行とザ行)

(語頭)

- 1) さんぶ<三部> 2) しかい<司会> 3) すいぶん<水分> 4) せんじつ<先日>
ざんぶ<残部> じかい<次回> ずいぶん<随分> ぜんじつ<前日>

5) そうく僧>

ぞうく像>

(語中尾)

1) あさく朝> 2) あしく足> 3) いすく椅子> 4) しせんく視線> 5) ふそくく不足>
あざくあざ> あじく味> いずく伊豆> しぜんく自然> ふぞくく附属>

[短文]

- 1) あの産業は残業が多い。
- 2) 先妻の買った洗剤がまだある。
- 3) 詩集は次週返す。
- 4) 長女の長所は何か。
- 5) 酢(す)を凶(ず)に落とした。
- 6) 女子と女兒の意味は違う。
- 7) 船員は全員無事だった。
- 8) 自然に視線があった。
- 9) そっとはいってぞっとした。
- 10) 同窓会で銅像を立てることにした。

(タてトとダテド)

(語頭)

1) たいがくく退学> 2) てぐちく手口> 3) とうじく当時>
だいがくく大学> でぐちく出口> どうじく同時>

(語中尾)

1) いたいく遺体> 2) いてんく移転> 3) せいとく生徒>
いだいく偉大> いでんく遺伝> せいどく制度>

[短文]

- 1) 大学を退学した。
- 2) 短大の団体が支店まで市電で行った。
- 3) 天気が悪いので電気をつけた。
- 4) あしたは足駄をはいていく。
- 5) 得な話しには毒がある。
- 6) 京都の生徒は郷土の制度を調べた。

(パ行とバ行)

(語頭)

1) パイ 2) ピン 3) プーパー 4) ペン 5) ポール
バイ ピン プーパー ペン ポール

(語中尾)

- 1) せんばい<先輩> 2) さんび<賛否> 3) オープン 4) きんぺん<金ペン>
 せんばい<千倍> さんび<賛美> オープン きんぺん<勤勉>
- 5) ぜんぼう<前方>
 ぜんぼう<全貌>

[短文]

- 1) パイを倍食べた。
- 2) 先輩は千倍働いた。
- 3) ピンもピンもない。
- 4) 賛美歌の賛否を問う。
- 5) ベンチの上にペンチを忘れた。
- 6) 勤勉な人は金ペンをもらった。
- 7) ポケットに手を入れて、ぼけっとしていた。
- 8) ピンポンのボールがないので、プンプン怒った。

要 旨

本研究では、日本語音声の中で子音（無声音、有声音）について聴覚的、音声（調音）学的な特徴にその焦点をおき、韓国語を第一言語とする学習者が日本語を話す（読む）ときに起こる日本語の言いあやまりについて調査を行い、その分析を行った。

本研究では先行研究で明らかにされていない、次の二点に力点をおき、研究を行った。

1. なぜ、言いあやまりが起こるか、その原因を探るために言いあやまりの中でとくに注目されているインターランゲージ(Interlanguage:中間言語)に関する仮説を設定し、その仮説を言いあやまりの調査から検証した。
2. 従来の主観だけによる方法から脱却して、調査資料の検討、あるいは分析結果に基づく研究をした。

これらは先行研究の何れにも十分に組み込まれていない研究である。

本論文では、このような問題意識に基づいて言いあやまり研究を実践的な（教育的な面）の側面から、より体系的にとらえていくことを目指した。

今後の韓国における日本語音声教育の方法改善の上では、本研究の調査分析結果に示されている面がとくに重視されなければならないと思われる。

本研究では、研究対象の外におかざるをえなかった、子音の知覚心理学特性への反映の問題、子音と発話速度との関係などは、今後の課題にしておきたい。

キーワード：無声音、有声音、言いあやまり、干渉、インターランゲージ体系、
有標性概念、発達のプロセス

투 고 : 2008. 11. 30

1차 심사 : 2008. 12. 13

2차 심사 : 2008. 12. 27